

第8分科会 学校種間の連携

テーマ 「切れ目ない支援体制の構築」

提案2 「教育的ニーズに応じた就学・進路の支援の在り方」

～サポートファイル『にっこ・にこ』を生かして～

発表者	愛媛県 新居浜市立泉川小学校	教 諭	伊藤 幸
司会者	愛媛大学教育学部附属特別支援学校	教 諭	前野 麻記
助言者	愛媛県総合教育センター 特別支援教室	室 長	山内 望

I 実践に当たって(新居浜市の支援事業)

新居浜市は平成20年に発達支援課が設置され、早期療育部門を備えた新居浜市こども発達支援センターが平成22年10月に開所し、充実した支援事業を展開することができるようになった。サポートファイル『にっこ・にこ』(個別の支援計画)を保護者の希望の下、作成し、本人の特性をみんなで正しく理解し、どのような支援や工夫が有効なのかを共有し、本人や保護者、そして幼稚園・保育園・学校の先生たちみんなが、新しい環境でもスムーズにスタートできるよう活用されている。必要となった時期に作成し、2～3年ごとや進学前には、必ず保護者や本人と見直しを行い、次の進級・進学や進路先へ確実に引き継ぎ、25歳まで発達支援課で原本が保管されている。『にっこ・にこ』は、教育・福祉・医療・労働などの関わりのある機関と情報を共有し、一人一人が毎日を生き生きと過ごし、将来に向けて同じ方向を目指し支援していくためのものである。

また、「こうすればうまくいく特別支援教育ハンドブック～通常の学級における支援の在り方～」を、市内の小・中学校の先生方の力を合わせ、平成26年3月に作成した。日々の教育実践の中で培われた貴重な取組をもとに特別支援教育の視点から書き上げられた原稿は、学校教育のユニバーサルデザインを具現化したものであり、学校生活のあらゆる場面で役立っている。愛媛大学の吉松先生やスーパーバイザーの渡部先生に助言をいただき、「めざせ！ポジティブADHD」の著者である漫画家の「あ～さ」先生に、子供の気持ちがとても伝わるイラストを描いていただいた。校内でもハンドブックの研修会を毎年行い、授業公開の際には、ねらいと共に必ずハンドブックの掲載ページを記載して、どのような支援が行われているのかが見える化している。

II 実践内容

今から6年前、ありがたいことに希望が叶い、特別支援学級の子供たちと一緒に小学校から中学校へ行くこととなった。その初めての体験から、中学校では卒業後を見据えたどのような進路支援が必要なのか、高等学校での自立を支えるには何が必要なのか、いやその前に高校に合格するために今やるべき支援は何なのかを身をもって知り、子供たちと共に成長することができた。そして、その後、私がお預かりした大切な子供たちの支援にも役立った、Aさんへの支援を振り返っていきいたい。

1 小学校時代のAさんの支援

Aさんは小学3年生でお試し入級を始め、4年生から正式に入級することとなった。自閉スペクトラム症の男児である。自分がやることに必要性があるかどうか、Aさんのキーポイントだった。苦手な感情の表現では、担任が作成したヒントカードから今の気持ち

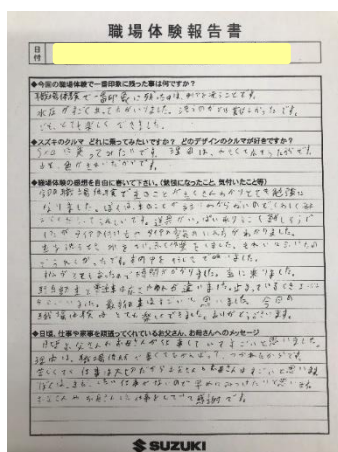
に近いものを選ぶのだが、最初は自分の気持ちが分からなかった。また、3つの外国の中から1つの国を選ぶことができずに、裏は白紙で0点になってしまった。複数の選択肢の中から、自分で自由に選ぶことができない子供がいることを知った。クラブ活動もなかなか決まらなかった。消去法を使って、自分に合うクラブを絞っていき、ラストは2択で決めることができた。部首も自分で言えるほど物知りだが、50問の漢字テストの1問目でつまづき、1時間固まってしまった。分からない問題は、パスして次に行くことができない子供がいることを知った。おしりをロッカーの中に突っ込んで、蜂の子のようになりクールダウンをした。狭い空間にいることが、落ち着く子供がいることを知った。8名の児童のサポートファイルを作成し、有効な支援を確実に中学校へと引き継いだ。

2 中学校時代のAさんの支援

新設された自閉症・情緒障がい特別支援学級の扉を開けると、廃棄処分の卓球台が置かれていた。これを捨てずに、教室で有効活用することにした。昼には給食の配膳台、昼休みには卓球台として、みんなの憩いの場となった。Aさんが2年生になった時、私は卓球部の顧問になった。「ダメなら辞めてもいいから」とAさんを誘った。3年の最後まで卓球部員としてやり遂げ、団体戦でも大活躍した。夏休みだけの約束で、私に関わる朝の駅伝練習にも参加した。体を動かすと脳の回転もよくなり、学習がはかどった。体育祭の総力リレーでは、バトンをもらう相手と渡す相手の女子の顔と名前を、確実に覚える必要があった。女子も自ら「A、私にバトンをちょうだいね!」と顔を見せてくれた。本番は、走りが速くなった上にスタミナもついたので、周囲から「はや〜い!」と感嘆の声が沸き上がった。

小学校からの関わりを生かし、9年前の入学式の写真を教室に掲示すると、休み時間や放課後、みんなが懐かしがって見に来て、いろいろな話をして帰るようになった。コミュニケーションが苦手な、なかなか顔と名前が覚えられなかったAさんにとって、自然と友達と接する機会が増えた。そこで得意な数学を友達に教えようものなら、「先生より分かりやすい!」と喜ばれ評判になった。Aさんが友達に教えることで、Aさん自身もさらに理解を深めていく様子がうれしかった。気が付けば、数学は学年でトップの成績をとることもあるほど、力を伸ばしていった。苦手な教科は得意な数学で取り戻すべく、図形の証明問題でもAさんが書く必要性を強く感じ、途中の証明文も順序立てて書くようになってきた。苦手な文章も、パターン化することで克服していった。学力も大切だが、何よりも自己肯定感がアップしたことが、大きな成果だったと考える。

忘れられないのは、2年生の職場体験学習である。工業高校を希望するAさんは、S自動車会社へ行くことに決まった。2日間生き生きと活動でき、最後は企業側が用意した報告書いっぱい、自分の思いやお礼までも書き上げたのである。私は何度も尋ねた。「本当に一人で書いたのですか?」と。興味があること、必要であることも重要だが、各設問が具体的で分かりやすく、見習わなければと痛感した。後日、Aさんが下校の途中に戻ってきて、「S自動車会社の男の人が来て、先生を呼んでいます。車も持ってきています!」と。慌てて玄関へ行くと、黄色い軽自動車が!私が珍しく色で悩み、決めかねていたのだが、おかげで即決購入できた。「担任と営業マンの橋渡し



までできたAさん、あなたがこの車を売ったのと同じだよ！いい仕事したね。ありがとう！」今でも心からそう思いながら、大切に乗り続けている。

初めての中学校での支援は、校長、学年主任を始めたくさんの先生方にお世話になったが、学校生活介助員2名の先生方には、本当に感謝している。思春期の男子たちが担任に言えない思いを何度も汲み取り、大きなパイプ役となってくださった。経験年数や資格も大切だが、絶対に高校に合格させるという熱意だけは誰にも負けなかった。よく観察して何が必要なのか、どのような支援が合っているのかを、本人の意志とすり合わせ見極める力と、小学校から築いてきた親子との信頼関係が、何よりも大切だと痛感した。

中・高連携の会で、高校の特別支援教育コーディネーターの先生方に出会えたことも、大きな安心となった。高校受験における合理的配慮の必要性と、絶対に差別がないことを直接お願いした。また、中学3年生夏の高校体験学習では、エアコンがよく効いた教室で夢中になって製作活動に取り組んだ後、嘔吐して大変お世話になった。

Aさんたちには「自分の特性を自覚した学習法を身に付けよう」とよく声を掛けた。すると、特別支援学級も学校生活介助員もなくなる高校生活に向けて、自立して学習するという自覚が、中3になって現れ始めた。困った時には、自分からヘルプを出せるようになり、誰を頼るべきかを、学校生活の様々な場面に合わせて学んでいった。決して、こだわることが悪いことではない。個々を尊重しながら、受験でのよりよい形に気付かせると、素直に自分から直すことができるようになっていった。

3 高校時代のAさんの支援

「お母さん、小学生のころによく入級を決断されましたね。今のAさんは、特別支援学級にいたとは誰も信じないくらい、自立することができていますよ」母親が私に教えてくださった1学期末の高校担任の言葉である。無事、県立の工業高等学校に合格し、特別支援教育コーディネーターのB先生が、引継ぎに来てくださった時、「どうしても上手いかないことがあれば、高校を辞める前に私に連絡してほしい」とお願いした。どの高校の先生方や本人たちにも、何度も頼んだ。高校1年生の11月に、B先生から電話があり一瞬焦ったが、「ものづくりフェスタ」に出る知らせだった。Aさんが、名だたる企業や高専を勝ち抜くとは、予想もしていなかった。案の定、親にも言ってなかったようで、本番前の会場で声を掛けた時は、見たこともない表情を浮かべたので少々心配になったが、勝ち進むにつれ、司会者に何度も向けられるマイクにも臆せず、受け答えをしている姿に涙が出た。これには、顧問の先生たちも驚いていた。ただ一度だけ返答に困った名前のくだけがあり、どうしても我慢できず会場から私が名前を叫んだ。「お母さん？」「いや、先生です」そこからは、司会者に何度も突っ込まれ余計に大変だったが、Aさんが「小学校、中学校でお世話になった先生です」と正しく説明し、司会者の要望に「先生、ありがとうございます！」とたくさんの観客の前で、素直に9年間の感謝を伝えてくれた。私は、連絡をくださったコーディネーターのB先生に、感謝の気持ちでいっぱいになった。

高校2年生の秋は部活動の大会に出場するため「ものづくりフェスタ」には参加できないことを知り、健闘を祈った。「勉強も部活も両立し、高校生活を満喫しています。部長になって関東の全国大会に出場するため、今日出発しました！」と12月、母親から喜びをかみしめるメールが届いた。

そして迎えた高校3年生。文化祭では、人前で説明する役をしっかりと果たす予定だと、B先生から電話をいただいた。「無理だと思うけれど、ちょっと抜けて見に来てほしいぐ

らいです！」この言葉がどれだけうれしかったか！本気で行こうと検討した。卒業直前の休日、手書きの祝電を各高校に持って行った。まさかAさんが、いくつも表彰されるなんて夢にも思わず。卒業式が終わってB先生が電話をくださり、みんながいる職員室で、私は泣きながら笑っていた。工業高校のホームページには、立派なAさんの姿が何度も登場していた。夕方、母親からも電話をいただいた。就職先の話も、詳しくお聞きすることができた。私はこれからもずっと、Aさんたちの応援団長だ！職場は地元だと思いきや、6か月間は関東でのリモート研修。頼るべきところは、しっかり先輩や同僚を頼って、様々な経験を乗り越えて、無事に帰ってきてほしいと願う。



優勝した空き缶コプター



先輩たちの中央で記念写真



Aさんの空き缶コプターの滞空時間が最長に！

III 成果と今後の課題

自分のやりたかった分野がピッタリ当てはまり、適切な支援と努力が加わると、ここまですべて開花することをAさんが教えてくれた。工業高校での3年間は、Aさんにとって本当に自分らしく活躍できる最高の舞台になったと思う。決してここまで成功ばかりが続いた訳ではない。小学校では、保護者の抱える悩みも聴きながら、支援の在り方を何時間も話し合ってきた。中学校では、Aさんも一緒に話し合い、自覚のもと努力を重ねた。支援の長い道のりを刻んだ「サポートファイルにっこ・にこ」をしっかり引き継ぐことで、満たされた高校ライフが実現したのだ。この原稿を打ちながら、みんなの頑張りを思い出し、何度も目頭が熱くなった。

成功の裏には、数々の失敗もある。息子とAさんたちが同じ学年なので、親のように初めての受験に力が入った。Cさんがゲームにはまり睡眠障害に悩み、登校しても気持ちが学習に向かわないこともあった。頑張ろうとしても、私の息子と同じようには頑張れない辛い思いを、Cさんが母親にやっと話してくれ理解できた。特別支援学校を受験し、産業科へ進んだ。2年生では、県の文化祭美術・工芸部門で優秀賞を受賞。3年生の運動会では、「〇特ソーラン」をセンターでカー杯踊り切った。高等部入学と卒業のタイミングでぶつかった問題からも、担任だった私が、もっと特別支援学校に対する認識を深める必要があったと痛感した。学校種間の連携において、本人や保護者が正しく理解、納得した上で受験や就職活動に取り組み、安心できるようサポートすべきことが今後の課題だと考える。

また、教え子の中には転籍をした男児がおり、投薬初日の3月に休校、4月に私が担任となり、幼稚園から引き継いだサポートファイルを熟読した。薬を飲むことなく、感情のコントロール、プリントのお直し、姿勢の保持など様々なことを、作業療法士のF先生と家庭と学校がタッグを組み、本人の自覚と努力のもと乗り越えてきた。決して形式だけの引継ぎに終わらせず、本人の成長に合わせて今、必要な支援ができているかを見直しながら、泉川のみんなを乗せた、幸せの支援列車を発車させたい。

〈指導・助言〉

本実践は、自閉スペクトラム症のあるAさんに対して、小学4年生から中学校卒業まで特別支援学級担任という立場で、またそれ以降も元担任として成長を見守りながら、懸命に支え続けた取組である。サポートファイル「にっこ・にこ」（個別の支援計画）を活用しながら、Aさんの教育的ニーズに応えようと、その時々との関係者と連携・協力する姿が具体的に述べられている。「切れ目ない支援体制の構築」という視点から、本報告の中で改めて重要だと考えたことをまとめてみた。

○ 「にっこ・にこ」を本人参加型で作成したこと

切れ目ない支援体制を構築する際の大切なツールとなるものが、「にっこ・にこ」である。作成に当たっては、保護者や本人の願いを踏まえることから一歩踏み込んで、可能な限り本人も話し合いに参加して、内容を決めていくことが重要である。将来の自分の姿を思い描きながら、自分の良さや課題を見つめること、そして支援目標や支援内容、合理的配慮を決めていく過程は、よりよい自己理解を後押しするもので、キャリア発達を促すことにつながるものであると考える。

○ 中学校までの指導や合理的配慮を確実に高等学校に引き継ぐこと

令和3年1月の中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の「4 新時代の特別支援教育の在り方について」の中で、特別支援学級、通級による指導を担当する教師に求められる専門性について、実際の児童生徒への指導に関わる事柄の他に、「関係者間との連携の方法」が挙げられていた。現状では、中学校まで特別支援学級や通級指導教室で指導を受けていた生徒が、高等学校において指導を受けるに当たって、中学校などでの指導や合理的配慮の状況が十分に引き継がれていないことがある。本実践で述べられていた、中・高連携の会での高校の特別支援教育コーディネーターの先生との関係づくりや、Aさんの進学先の先生方との連携・協力の在り方は、本人や保護者に安心感を抱かせるもので、ぜひ見習いたいと考える。